



「友よ、生きよ」
衛生兵の願い

ある日、役場から「入隊せよ」との通達があり、「昭和十七年四月十日午前十時」が入隊の日時となっていた。当時は「お国のために命を捧げること」が名誉なこととされていたので、私は、一抹の不安を心の底に静めた。

当日、広場には出征する私たちを見送る人であふれ、家族や、村人が手に手に日の丸の旗を振って私たちの出征を祝い励ましてくれた。

また、列車には入隊兵や見送り人が大勢乗り込み、「万歳、万歳」の声は、一段

※出征：軍隊に加わって戦地に出かけること。

と大きくなり、ただ感無量の思いだった。

「両親や兄弟よ、さようなら」と心の中で思い、大粒の涙を流した。

そのうち、列車は連隊のある停車駅に到着した。そこで下車し、六百メートルくらい先の連隊に通ずる道路には旅館、民宿、食堂、土産物屋などが軒を連ねていた。その店先や道路で、戦地に行く我が子を抱きしめて泣いている父や母。涙をいっぱいためて我が子を抱きしめている入隊兵。また、若夫婦同士が抱きあいながら別れを惜しんで、声を殺して泣いているそんな光景ばかりが目に入ってきた。そのそばで何も知らない幼児たちが無邪気に遊んでいる姿が更に涙をさそう。そういった別れを惜しむ姿は、入隊後しばらくの間、眼から消えることはなかった。

いよいよ軍隊生活が始まった。その日の夕食には赤飯が配られ、古兵、新兵全員が揃ってのごちそうだった。

一夜明け、起床ラッパの音で営庭にかけ足で出て、すぐ点呼だ。遅い者、下駄箱が分からないのか素足で並ぶ者など様々である。

入隊後、日が経つにつれて、古兵たちの所持品の検査と、それに伴い個人的な言い
がかりや虐めが徐々に度を増してきた。毎日、私物検査、整理整頓は当然のことで、
時には班員一人の不始末に対する罰として、全員整列して平手打ちを受け、さらに新
兵同士が互いに叩きあいさせられるなど、想像を絶することが次々と起きた。

ようやく、演習と訓練の六か月の教育が終わり、連隊長及び参謀本部将校、各中
隊長の第一期の確認・検査を受けた。その後は営内で一般の仕事に就くことになった。
その仕事は、蹄鉄、鞍工、炊事、ラッパ、衛生その他いろいろあった。私は、衛生を
希望した。各中隊から一人採用のところ、応募は三十数人となり試験による人選とな

※古兵…長く軍隊にいる兵士。

※新兵…入営してまもない兵士。新参兵のこと。

※営庭…兵士たちが集団で生活する宿舎にある広場。

※演習…実戦に備えて同じような状況を想定して行われる訓練。

※参謀本部…天皇直属で、軍隊の統率・指揮する最高機関。

※営内…兵士たちが集団で日常生活する宿舎の中。

※蹄鉄…馬のひづめに打ちつけ、ひづめの損傷を防ぐ鉄具。

※鞍工…人または荷物を乗せるために、馬や牛の背に置く道具を作る職人。

った。私は、必死に勉強してトップ合格を果たすことができた。それから六か月間、厳しい衛生救急法の教育が始まった。

初めは、簡単な勉強だと軽く考えていたが、その内容は、日を追うごとに難しくなり、時には人体解剖やウサギ、犬などを麻酔で眠らせ、内臓の位置やその機能の働きを詳しく勉強した。その他、化膿した外傷患者の治療や膿の出し方、ガーゼの挿入方法など覚えることは山ほどあった。

私は、夜の点呼が終わると暗い電灯の下で、毎夜十一時過ぎまで予習や復習をし、おかげで三番で卒業することができた。その結果、事務室勤務となった。

毎日八時に中隊の患者を整理させ、医務室へ行くのが日課となった。まず、内科患者には軍医診察の助手。そして、外科患者の治療。また、皮膚病患者は悪臭が鼻を突くが、これらの患者の治療が日常の任務だった。そんな治療によって元気になっていく患者の笑顔を見るのがうれしかった。また、連隊全員の予防接種には特に熱中した。ある日の夕方、同年兵が私を捜していた。

「松塚衛生兵、実は廊下の片隅で、頭から血を流して顔を両手でおおっている者がいるから診てくれ」

早速、走って行くと、その者は、両手を真っ赤に血で染めていた。私は静かに医務室に連れていき、日直上等兵に実情を話し、医療用の針と糸にペアン鉗子二個を借りて治療室に入った。

まず、前頭部の傷口を消毒し、異物が有るかないかを確かめた。それから、糸を通して釣針のような針で一方の皮膚片から一針ずつ五針縫い合わせ、傷口が平面になるように抑えながら絆創膏を貼って手術は無事終わった。私にとってこの手術が初体験であり、手の感触も伝わって大いに自信がついた。

五月のある日、高級軍医が私の机の前に来て、

※軍医：軍隊に属し、軍人の医療にあたる医師。

※同年兵：同じ時期に軍隊に入った兵士。

※衛生兵：病気やけがをした人を救護する兵士。

※ペアン鉗子：手術や外科処置に用いる鋼製器具。（23ページの挿絵参照）

「松塚、この書類に目を通しておけ、返答は急がなくても良い」

と言って、帰って行った。

バインダーに一枚の印刷物が挟んであった。それは、豊橋中部軍司令部発の命令書で、「仏領インドシナ駐屯軍司令部軍医部へ衛生兵一人派遣せよ」とのことだった。

私はこのチャンスを逃してはならないと思い、早速、高級軍医の元へ行き、

「私を是非ここへ行かせてください」

と懇願し、承知してもらえた。

四日後の夜の点呼後、班長が、

「この班の松塚衛生兵は、本日付命令により仏領インドシナ軍司令部に転属した」と読み上げると、班内一同には驚きの声が上がった。

人事係の准尉の計らいで、

「君は南方へ行くことが決まったので、しばらく実家に帰り両親や兄弟と良く話しあ
つてこい」

と、うれしい思いやりの言葉をいただいた。

早速、実家に帰り、家族に囲まれた陽だまりの中で、思う存分、心の安らぎを得た。実家を離れる日、私は南方へ行く心構えを家族に話し、皆を安心させた。母は、赤飯を炊いて先祖に手を合わせ、私の無事を祈ってくれた。また、別れぎわには、不安そうに涙を流していた。

五月二十八日、衛生上等兵に進級して豊橋中部軍司令部に出頭すると、各部隊から選抜された下士官四人、兵二十五人、衛生兵一人、計三十人の一団が編成され、六月二十五日「三池丸」に乗船した。近くに待機していた仲間の船「安芸丸」が既に出発準備を終えており、日没時を見計らって二隻で一路台湾の高雄港に入港した。

※衛生兵：27ページの注を参照。

※軍医：27ページの注を参照。

※南方：南の方にある国。特に戦前、東南アジアの諸国や南洋諸島をいった。

その後、夜間航行を続けた船団はフィリピンのマニラ湾に入った。甲板から眺めた港には、沈没船が二十隻近くも有り、まるで船の墓場となっているのには驚いた。一行は上陸し、宿舎でしばらく世話になることになった。行進途中、街路樹の美しさや、舗装された幅百メートルの幹線道路が東西にまっすぐ続き、見渡す限りの大平原の雄大さに感動した。

一方、右側の高台にある三階建ての建物は、半分以上が爆撃で破壊され、そのものすこさを伝えていた。

上陸して二晩目の夜半、突然バンバンという銃声が響いた。それはゲリラの襲撃だった。その時改めて敵地にいる恐ろしさを感じた。

午後は、半日ほど外出が許され、四、五人一組で恐る恐るマニラの街を歩いた。また、映画館では『阿片戦争』や『マレーの虎 ハリマオ』が上映されていた。

一週間が過ぎて、我々の乗船する船が入港したことを知らされた。次の目的地、仏領インドシナのサイゴンへ出発だと喜び勇んで乗船した。

七月十五日によくやくマニラを出港した。青黒い海と高波が押し寄せ、船は次第に木の葉のように揺れ始めた。すると仲間の中には次々と船酔い患者が出始め、私のところへ気分が悪いから薬をくれと言ってくる者が続出し、軍医がいないので、全部私^{わたし}が処置^{しよち}をしなければならなかった。船員に、

「ここを通過^{つうか}するには、あと何日ぐらいかかるのか」

と尋ねると、

「約一週間程度^{ていど}だが、ここは魔^まの南シナ海^⑧」

と答えた。船の揺れは一段と激しくなり、船幅七十メートルの甲板^{かんばん}を、船が揺れるたびにバケツが音をたてて右舷^{うげん}と左舷^{さげん}の間をコロコロと転がっていた。今日で三日間、何も食べない者が七十パーセントもいて、毎日残った食事を船員が全部海へ捨てていった。

出港して六日目。荒れ狂う南シナ海航行中、船内のブザーが非常事態^{ひじょうじたい}を知らせた。

※軍医：27ページの注を参照。

「全員、軍装して甲板に集合」

の命令が出た。船のブザーは相変わらずブーブーと鳴っている。そのうち、誰かが右舷の遙か前方を指差しながら、

「敵の潜水艦だ」

と叫んだ。

全員がその方向を見ると、黒い潜水艦が静かに浮上し、ハッチを開けて二人の将校が出てきて双眼鏡で我々の船の方を眺めていた。その瞬間、ほんの二分ぐらいたったろうか、潜水艦は静かに徐行して波間に消えていった。

それから後は、波も穏やかで、七月二十五日、全員が無事にサイゴンに上陸するこゝとができた。そこには軍司令部から二台のトラックが迎えに来ていた。まず衛兵隊長の片山少尉から、

「長旅ご苦労であった。軍司令部は将校が多いために、服装や態度は特に厳しいので、礼儀を欠くことのないよう」

との訓示があった。トラックに乗車し、郊外の軍司令部に到着した。ここで一団は解散となり各自の勤務先へとそれぞれ別れて行った。

私は、まず軍医部長に転属の挨拶をし、事務室で将校、下士官計十一人と同年兵二人と事務所の皆さんに挨拶をした。同年兵は司令部での勤務内容及び直属上司の宿舎、それに軍医に同行して外部に出る場合の注意などを、親切に教えてくれた。夕食時には二人の先輩から内地のことを尋ねられ、また仏領インドシナは日本に良い感情を持っており治安も意外によく気候も日本と似ている。住み良いが、ただ蚊だけは特に注意するようにと言われた。

昭和十八年十一月ごろになると、敵の航空機であるP 38やグラマンが低空で偵察に飛来する回数が多くなり、夜はB 29の来襲が頻繁になってきた。ある日、朝四時ごろ

※軍装…戦闘のための服装や装備。

※軍医…27ページの注を参照。

※同年兵…27ページの注を参照。

から夜十二時までの間に、グラマンが延べ二百五十機ほど港の倉庫や飛行場を重点的に襲撃した。飛行場の燃料タンクがやられ一晩中燃え続け、またドラム缶の破裂音が夜明けまで鳴り響いていた。しかし、味方の航空機は一機も姿を現さなかった。

昭和十九年の春には、日本から妻子もあるだろうと思われる中年の召集兵が続々とサイゴンの宿舎に入ってきた。そのうち、インパールのマンゲル・イラワジ川地区から腸チフス、赤痢、アメーバ性赤痢とデング熱、マラリアなどの患者の一団が搬送されてきた。伝染病患者はすぐ陸軍病院へ送られ、外傷患者を医務室で治療することとなり、医務室は患者で溢れかえった。そんな患者の大半が一か月余り、お風呂にも入れない上に、汗と患部が化膿した悪臭などで医務室全体が魚の腐ったような臭いになった。

とりあえず、患者にシャワーを浴びさせた。誰を見ても着のみ着のままのボロボロの垢だらけの軍服、靴はかかともなく、指が外へ出るくらい大きな穴の空いた姿にその労苦が伝わってきた。早速、私は治療に取りかかった。まず患者を椅子に座らせて、

風呂場の椅子のような台に足先を乗せさせ、なぜこんなになったのかと原因を尋ねると、風呂にも入れず不潔が重なり、それに蚊や虫にさされながらジャングルを移動する際には山ヒルに血を吸われ、かゆいので我慢できず、かいたために化膿したという。これくらいなら私でも治療できると思った。

その患者は、足の甲は骨だけが固く、回りは化膿してポトポト、骨の下は膿と汚れた血だと思うが、何分、悪臭が鼻を突く。足の甲の消毒を入念にしてから、メスの先端を皮膚に触れた瞬間、膿が顔面、メガネ、白衣にパツと飛び散ったかと思った時、小さな卵のような膿の固まりが患者の足元から押し出され、その卵の芯にはウジ虫がうようよ動いていた。五百ccの大注射器に消毒剤液を入れ、骨の奥の肉を洗うため、思いきり注射液を吹きかけると、骨と肉の間から次から次へとウジ虫が流れ出てくる。これを三、四回繰り返し返し赤チンキを塗布し、消毒剤ガーゼを傷口に入れて一応治療は完了した。患者は安心したのと、膿が出尽くしたため痛みが取れ、笑顔になり喜んでくれた。朝夕ガーゼ交換を一週間くらいするからと伝えて次の患者に移る。

中には右膝みぎひざの右側をブクブクにはらした患者かんじやもいた。これも山ヒルに血ちを吸すわれて化膿かのうしたらしい。約三センチメートルくらいの卵たまごの黄身きんの大きさの穴あなで、皮膚ひふの周りは白色で、骨ほねまでは僅わずかしかなかった。念入りに薬を塗布とふし、ガーゼの交換こうかんは朝夕二回必ずするようになると言い聞かせた。もう一人の患者かんじやも膿うみは三センチメートルくらいの深いところに根があり、全部除去じよきよしなければ必ず再発さいはつする恐れがあるので、体は常に清潔せいけつにして、衣服は良く洗濯せんたくすることが大切だと言った。傷を治した者は原隊へ復帰ふっけい、より近くの部隊へ転属てんぞくしていった。

インパール・イラワジ川作戦より送還そうかんされた外傷患者がいしやうかんじやもほとんど原隊に復帰ふっけいしたが、それも束の間つか、今度は海難者かいなんしやの一同が大勢医務室いむしつを訪れた。顔面をマスクでおおった患者かんじやが二十人近くいる。実は、船が魚雷ぎよらいで沈没ちんぼつしたため、四時間余り浮ういていたところを救助された人たちだった。船が沈没ちんぼつして流れ出た重油の火の中に首を出したため、首から上うへが火傷やけどでやられ、耳が焼かれて無なくなった人や、眉まゆや鼻はながただれているという人ばかりだった。若い男の大切な顔がこんなになって本当に気の毒だと思おもいながら、

眼、鼻、口の部分を開けた大きなマスクに治療薬を塗り、顔面に当てて一週間はこのままでいるように言つて、休養室で休ませた。このような患者が毎日来た。

現地人も働いている埠頭の被服庫や兵器工場が、軒並みB29の爆撃にやられた。ちようど夕方方の出来事で、軍医を始め医務関係者は全員救護班となつて現場に行つた。途中、所々に八〜十メートルほどの爆撃の穴があり、中には片方の足や肉の塊が散乱している。それも、一番新兵である私の仕事となる。持ってきた袋やバケツに足や肉片を拾い集める姿を、現地人がじーっと見つめていたが、どんな気持ちで見ているのだろうか。

爆撃後の患者収容のため、ガレキの下などを捜していると、頭を下に突つ込んで両足を砂地の上に出している現地人を発見した。足をパンパンたたくとピリピリ足に反応が起きた。私が強心剤の注射をすると治まったが、さらに二、三度たたいて注射した時には、何の応答もなく諦めたこともあつた。また、付近では頭が割れて脳みそが噴き出し、砂や埃が顔をおおっている様子を見て、戦争の恐ろしさを改めて知つた。

命あるものを何としても救いたい。それが私に与えられた任務であり、この上ない生きがいであった。

いよいよサイゴン勤務は一年余りとなった。戦争は益々激しくなり、突然、軍司令部全員の北部仏領インドシナのハノイへの転出が決まった。先発隊として司令部から六十人が選抜され、救護班としては軍医大佐一人、衛生薬剤中佐一人、衛生兵一人は私が同行することとなり、汽車で出発した。昼間は敵からの銃撃で山への避難を繰り返しながら一週間の費やし、やつとこのことで全員が無事にハノイに到着した。

早速、宿舎や事務所、それに医務室の設定に走り回った。二十日後、後続の第二陣が到着したが、私たちには思わぬ誤算があり、大変忙しかった。その誤算とはサイゴンの昼は三六、七度の猛暑なのに、ハノイの夜は二十二度まで下がることだった。夜

※軍医：27ページの注を参照。

※新兵：25ページの注を参照。

※強心剤……心臓機能の衰弱を回復させるために使用される薬剤。

※衛生兵：27ページの注を参照。

中は特に冷えるので毛布二枚は上布団として必要なことが初めて分かった。そのため体の弱い者の多くは、疲労が原因でマラリア・デング熱・風邪などにかかり、毎日、看護だけでも、てんてこ舞いの連続だった。

昭和二十年の正月には在留邦人の家に軍医とともに招待され、ご馳走をいただき楽しく過ごした。日本人患者の診療や治療は、積極的に行うよう直属の軍医から言われていた。三月に入ると、各方面から各地の部隊が玉砕したとの噂話が耳に入るようになり、戦況不利となった現地の様子が新聞にも記載されるようになった。親しい現地人からは、

「兵長さんは軍医だから、私の国の軍医になりなさい。そうすれば、土地、家屋さらに娘と、全部もらえるよ。また、軍隊勤めの生活はとても安心だからここにいなさい。日本に帰っても家は焼け、食べ物は何もないよ」

と、何度も誘いにきた。

戦争の悪化は予想外だった。軍隊生活を四年して兵長でいても、内地からの初年兵

は一人も入ってこないために、私は毎日、初年兵の仕事をやらされた。

四月には、内地の各都市がB29の爆撃で焼け野原になったというニュースを耳にし、私の故郷の福井市も大空襲により全滅したことも聞いた。今度は日本に帰るべきか、ハノイに留まるべきか迷ったが、何はさておいても、一度、両親や四人の妹たちに会って、親孝行をしたい、妹の相談にのってやりたいとの思いが強くなった。

昭和二十年八月十五日正午、全員が司令部前に正装して集合せよとの命令があり、一同が玉音放送を聞いた。軍司令官より軽率な行動を慎むようにと訓示があったが、翌日からは軍紀は乱れ始めた。自動車隊の一行三十人が一団となり衣類、食糧、兵器、弾薬、燃料などを車二台に山積みして奥地に向かったことや、既に現地的女性と夫婦関係にあった者は早々に司令部を去って行ったことなどを知った。

※軍医…27ページの注を参照。

※玉碎…9ページの注を参照。

※初年兵…入隊してから一年以内の兵士。

※軍紀…軍隊の規律。

武装解除には中国軍が来た。先頭は二十人ぐらいの将兵が乗馬で、また、後方には多くの兵隊が徒歩で来た。靴の代わりに草鞋ばきで、鍋、釜、食器類を片方に、もう一方には衣類その他を入れ、天秤棒をかついで来た。食糧は全て現品配給のため鍋や釜が必要で、夜寝る時は野宿か民家の軒下だった。大小便について尋ねると、野糞が彼らの習慣だと言った。この野糞が原因でハノイの二円では中国軍進駐直後からコレラが大流行し、軍医部はてんでこ舞いであった。実際、簡単にコロリコロリと死んでいる。気分が悪いと言いついてから六時間くらいすると、米の研ぎ汁色のような白い便が排出されるのがこの病の特徴であり、ほとんど体内の水分は出てしまい、コロリと天国へ行ってしまう。

衛生兵には方々から呼び出しがある。私は、患者の診察が終わると、炊事場に行き、梅干しの汁を湯飲みに半分くらい飲み、コレラの感染予防とした。

いよいよ敗戦国として、中国軍に武器などの引き渡しが始まった。司令部は指揮下部隊の兵器、弾薬、各種砲、自動車、その他衣服類一切を取りまとめる責任を負わさ

れたため、各部、班より三人ずつ選んでその整理を命じた。軍医部は軍医薬劑将校と私で、医務関係の機器、薬物、消耗品などの一覧表を英語、ドイツ語、日本語で八部作るよう命じた。私はもっぱら数量記入を行ったが、それらは全て日本国の賠償に当てられるのだと聞かされた。

二日ほどして、中国軍より砲や銃、自動車など機械類の操作が未熟なため、毎日、各部門から教育者を出して欲しいとの要請がきた。このため、私は衛生兵として参加した。例えば、皮膚病の治療で注射をするにしても、シャワーや風呂に入ったことがない人たちだから体臭が鼻をつき、衣類は垢で油を塗ったようであり、また、足は蛇のうろこのように固く、消毒液も皮膚に染みこまず流れていく有様だった。しかし、中国軍は心やさしく、ひどい扱いをされることはなかったもので、安心して毎日勤める

※武装解除：戦いに負けた者や捕虜などに対して、その兵器を強制的に取り上げること。

※軍医：27ページの注を参照。

※衛生兵：27ページの注を参照。

ことができた。

一方、司令部の全員は、ハノイから百二十キロ離れた港町海防で捕虜収容所同然のところに集結して、自給自足の農業に従事していた。そして三月中旬ごろ、軍医より、「いつでもここを引き揚げられるように書類等を整理しておけ」と言われ、帰還できる日も近いと悟った。

第一船が出港する十日前に、約百日ぶりに元気で皆と合流した。まず作成した賠償リストと乗船名簿を提出すると、上司より、ねぎらいの言葉をいただいた。

「大変だったろう。ご苦労だった」

私は、ここで上司と別れ、同僚の待つ班へ帰ることにした。

班での夕食は、大宴会となった。

「松、また得意の演歌を歌ってくれよ」

「演芸大会では一位だったよな」

※軍医…27ページの注を参照。

先輩たちにはやし立てられ、私は得意の演歌を披露した。

いよいよ待ちに待った帰国の日が近づいた。

第一便は真っ白い船で、煙突を利用して赤十字の印がハッキリ見える病院船だった。白衣を着た患者が続々埠頭の方へ集まっていく。私は乗船名簿でチェックしていた。その時、私の姿を見つけた患者が言ってくれた。

「松、世話になったな、有難う」

「元気でね。日本で会おうな」

と、思わずその手を握り、涙が出そうです。それ以上言葉が出ず、ぐっと口をつぐんだ。それから続く四十人ほどの患者は、全て私が手をかけた患者ばかり。

「松塚衛生兵」と呼ぶ者、「兵長」と呼ぶ者、ほとんどの者は「松」だけだった。既に甲板のデッキに立っている患者は、顔ははっきりしないが白衣だけ目立ち、一生懸命に手を振っていた。

船は静かに港を離れ、船上の者の姿も徐々に見えなくなつた。その夜は彼らの顔、

顔、顔が頭の中から離れず眠れなかった。

その後、第二、第三、第四船と続々と内地へ向かって出港していき、帰還する者も次第に少なくなってきた。司令部内の身体検査や予防接種を実施したため、私を覚えていた人が意外に多かった。お世話になったと握手をしたり、中には足の脛の傷跡を出して、サイゴンで治療してもらったのだと話してくれたりする者などがいて、再び別れを惜しんだ。

昭和二十一年五月二日に名古屋港に上陸、全身消毒のため一泊、翌日最終汽車に便乗し、夜十時過ぎ、五年振りに懐かしい我が家に着いた。そこで一番心配していた実兄が戦死したことを知らされて、涙が止まらなかった。

遺骨箱を開けたが、現地の砂が小サジ一杯入っていただけだった。

(原作 松塚喜代隆 「仏領インドシナ駐屯軍司令部勤務の衛生兵の手記」)

※衛生兵：27ページの注を参照。